

令和7年度 地域連携推進会議 議事録

事業所名	障害者支援施設 エビノ園		
開催日時	令和8年2月20日（金）19：00～20：30		
開催場所	エビノ園 会議室		
出席者	構成員	人数	備考
	事業所職員	3名	施設長、サービス管理責任者2名
	入居者	1名	N様
	入居者ご家族	1名	保護者会 会長 Y様
	地域の関係者	1名	町内 自治会長 Y様
	福祉に知見を有する方	1名	市内相談支援員 K様
議題	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自己紹介 2. 会議の趣旨説明 3. 施設概要・利用者の暮らしについて 4. 施設見学 5. 意見交換・質疑応答 <ul style="list-style-type: none"> ・見学、説明を聞いて感じたこと ・地域との関わりについて（地域と施設が協力できること） 		
協議内容・意見等	<ol style="list-style-type: none"> 1. 参加者自己紹介 2. 会議の趣旨説明 <p>地域社会との連携を通じて、利用者が地域の一員として安心して生活できる環境づくりを推進すること、施設の取り組みを紹介し地域の立場から意見を得て、今後の施設運営・地域連携の充実に繋げることが主旨である。</p> <p>エビノ園の制度的枠組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ● エビノ園は「入所施設」であり、法律上は18歳以上の身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者手帳を所持する方の暮らしの場である。 ● 障害福祉サービス：「生活介護」「施設入所支援」 日中は生活介護（入浴・食事・排泄介助・レクリエーション的活動など）を提供。 住まいの場として「365日24時間」支援により安心を支える。 ● 地域向けには「短期入所（ショートステイ）」を提供し、同日4名まで利用可能。 家族のレスパイト（介護者の一時的休息）や、家族高齢化に伴う施設入所への慣れを目的とする。 <p>理念面では、障害者支援施設は高齢者分野の「終の住処」ではなく、地域サービスを活用した一人暮らしや家族の元への帰還に向けた準備期間・通過点である。一方で、全ての利用者に当てはまるわけではない現状もあり、このような施設も必要不可欠である。</p> <p>国の方針として、障害のある方が差別なく住み慣れた地域で地域の人々と共生する方向性が強く打ち出されており、本会議がその実現に向けたきっかけとなり、施設を近所の身近な存在と感じていただきたいと考えている。</p> 		

3. 施設概要・利用者の暮らしについて

運営法人である社会福祉法人永甲会の沿革・体制

- 設立：平成 10 年（当初は高齢者福祉を中心に開始）
- 平成 21 年に他法人と合併し、以後、障害福祉分野にも取り組み
- 法人理念：「その人らしい暮らしの継続」
- 市内事業所：高齢者施設 3 か所、障害者施設 2 か所、総合福祉施設 1 か所

エビノ園の利用者状況（別紙資料参照）

- 総数：72 名
- 男女比：男性 39 名／女性 33 名（ほぼ半数）
- 年齢構成：23 歳～85 歳、平均年齢 59 歳
- 入居期間：半数以上が 10 年以上の生活歴、平均入居年数は 14 年超

障害特性と支援ニーズの現状

- 身体障害の方が多く、主な障害は脳性麻痺・頭部外傷・脳血管障害など。
- 平均障害支援区分は 5.7 で、比較的高い支援ニーズの方が多い。
- 近年は高次脳機能障害の入所が増加。
- 重度の身体介護を要する方から、身辺の一部は自立可能でも見守り・声かけ・判断支援が必要な方までニーズが多様化。以前よりニーズの質的变化がある。

暮らしの様子と日中活動

- 特別なことに偏らず、起床・食事など生活のリズムを重視し、各自のペースを尊重。
- 日中活動は画一的に毎日行うのではなく、関心事や体調に合わせて、安心して過ごせる選択可能な時間を重視。
- 夕食後はゆったりと過ごし、夜間は就寝へ。長期入居者が多いからこそ、「いつもの場所・時間・過ごし方」が安心につながっている。
- 施設の雰囲気は、静穏な時間と賑わいのある活動の時間が併存し、生活の場としての空気感が保たれている。
- 新しい経験・刺激も大切と捉え、近隣中学校の体育祭や地域の祭りなどに参加。（行事報告資料参照）
- コロナ禍以降、地域ボランティアなどの地域交流が以前より非常に少なくなっている。

施設の運営体制と職員構成

信頼性・透明性の確保に向け、エビノ園では以下の委員会を設置し、いずれも 2 ヶ月に 1 回の定期開催で運用している。

- 身体拘束防止/事故防止：原則、身体拘束は「行わない」を基本。やむを得ない可能性がある場合は複数職員・役職を含めて理由・方法を記録し、必ず振り返って「拘束を回避できる代替」を検討。

実際の事故のみならず「ヒヤリ・ハット」段階も共有し、原因を検討。

- 虐待防止：研修と振り返りを継続し「慣れ」による逸脱を予防。

職員が抱え込みを避けられる相談体制を整備。

意見・苦情は内容共有の上、改善策を検討し、必要時は関係機関へ報告できる仕組みを構築。

- 感染症対策：発生時の手順、備蓄、動線確認を定期的に見直し。

組織運営の姿勢として、全てが完璧ではないが、確認・振り返りを組織として継続している。

人材面では、福祉分野全体の職員不足が全国的課題であり、エビノ園でも日本人の入職希望者が以前より減少。これを背景に海外出身職員（インドネシア、ネパール、スリランカなど）が多数従事し、職員構成の「3割～4割近く」を占める状況である。日本の介護を学ぶ強い意志で来日しており、介護技術のみならず、利用者の尊厳の守り方、言葉遣い、日本の福祉の考え方で含めた指導を実施。言語的ニュアンスや文化差に起因する難しさはあるが、明るさと前向きさが利用者・職員双方に良い刺激を与えている。

今後の方針として、施設内で完結させず地域との関わりを少しずつ増やすことで、利用者新しい刺激・経験をもたらす、自己選択の機会を広げていきたい。

4. 施設見学

5. 意見交換、質疑応答

施設見学の感想や施設への要望

- 介護用リフトの導入について
通院介助やトイレ介助時の介助者側の負担が大きいことは共感できる。このような機器の導入については賛成である。
- 居室以外にも複数の居場所となるスペースがあり、利用者が好みの場所で過ごし、日常的な関わりが生まれている様子が想像できた。施設の雰囲気や医療的イメージは全くなく「障害のある方の住まい」としての居心地が感じられる。
- 誰でも自由に購入可能な「日用品（ティッシュ、歯磨き等）」や「お菓子」を扱う売店設置してほしい。→過去に日曜のパン屋来訪があったもののコロナ影響で中止となった。現状は自販機によるジュース購入のみとなっている。
現時点で実現の可否については未定であるが、ご利用者からそのような希望があることを把握した。今後、必要性や実現可能性について検討していくこととする。

地域社会との連携強化に向けた具体的な方策（意見交換・情報共有）

- 過去にはパン屋の来訪による直接売買体験、美容師訪問による理美容サービスなど、外出が難しい利用者向けの機会提供を行ってきた。コロナ禍で機会が減っていたが、今後地域のお祭り等の行事参加を含め、交流の深化を目指したい。
- 地域行事の現況としては、今年度町内の夏祭りが無くなり、敬老会が毎年9月に開催されているが、地域行事は全般的に縮小傾向である。現在、エビノ園には回覧板が来ておらず、町内行事等の情報がない。
→自治会長様より、施設にも回覧板が届くように手配、次期自治会長への伝達等していただける事となる。
- 過去、エビノ園に来ていただいていたボランティアは高齢化で活動終了している。コロナで多くの事が中止となった現状を踏まえ、ボランティア活動などで活性化に繋がっていきたく考えている。
- 施設内のテラスや広場、花壇などを「地域活動の拠点」として提供し、高齢者のものづくり・園芸活動、共同農園のような協働を通じて、地域住民が施設に入りやすくなり、利用者との自然な交流が生まれる可能性もあると感じた。

- 秋祭りについて、今年度は一般公開で実施し、初めて「マルシェ形式」で開催した。結果として「クレープはすぐ売り切れた」との実績もあり好評であった為、次回もマルシェ形式で一般公開し、現在業者と打ち合わせ中である。保護者からは、職員の負担軽減もあり賛同の意見を頂いた。

防災・安全対策における地域協力の模索

- 町内の防災訓練は、9月頃に朝8時に近隣の駐車場に集合し、点呼・公会所への連絡を行うことを年に1回程度している。所要時間は10～15分程度の簡単なものである。防災協議会では消防を招いて「縄の結び方」「簡易トイレの作り方」等の学習を年1回程度実施している。
活動情報は基本的に「回覧板」に記載される。
自治会では町内の「要介護支援者」の名簿を保有している。
災害時には施設と地域、双方のバックアップ・協力が必要である。
- 智積町の避難所は基本的に「桜小学校」であるが、エビノ園がある辺りは智積町内でも「桜町・桜駅側とは異なる飛び地」に位置し、避難先は「三滝中」となる。そのため、エビノ園がある智積町第6自治会は、「川島地区」と「桜地区」の2つの防災協議会に所属している。自治会長様より、川島地区の防災協議会へも施設の連絡先を共有、もしくは回覧板等で施設側が会議案内等を受けられるようにご協力いただける事となる。
- エビノ園では令和7年5月と令和8年2月に職員より不審者被害（陰部露出、追尾等）の情報があり、警察にパトロール増強を依頼済みである。
- 施設付近の旗当番など要請があれば協力可能である。中学校近くの交差点では学校や心配な方が独自に旗当番を実施しているが、その場所は「高角町自治会」が管轄である。こちらも高角町の自治会に共有していただける事となる。

施設運営上の課題と今後の取り組み

- 感染症対策に伴う対応として、方針としては本来「就業中はマスクを外し、顔を見せて関わる」方向を目指し緩和を検討していたが、インフルエンザの流行もあり「マスク着用」「面会時間短縮」を継続している。家族の自由な面会から「事前予約制」への移行が続いており、保護者会でも面会緩和の要望が最も多い。
施設には体が弱い方が多く、施設の構造上、感染が急速に拡がりやすい環境である。エビノ園でも過去に数回クラスターを経験しており、5類化後も「世間との温度差」を実感しており、地域の一般的なマスク着用状況とのギャップへの心苦しさを難しさがあるが、今後も感染状況に応じて緩和を目指していく。